

パーマネント ランド

10月5日のレポートで、「地方消滅」と「地方創生」をテーマにした。これを読んでくれた知人から、表記の映画を紹介してもらい、さっそく愛用のiPadにより見てみた。これも情報がすぐに得られる「レポート効果」だ。

文化庁委託事業若手映画作家育成プロジェクト2011の作品である。山村の「廃村」をリアルに描いた30分の映画である。ロケーション協力として岐阜県恵那市、東濃鉄道、恵那市上矢作町の皆さんなどが列挙され、身近で親近感を覚える。恵那市と周辺町村との合併には「思い出」があり、合併前に旧岩村町で講演したことがある(2003年4月19日、5月12日レポート参照)。合併後、周辺部からは「離縁したい」という話を聞いたこともある。

映画は「廃村」のために、住民の移住をすすめる山村の話である。わが家に行き、家に残りたい年老いた母を息子が複雑な気持ちで説得する様子を寂しげに描いている。



圧巻は土間(台所)を壊すシーンである。役場の職員が、また戻ってくる住民が多いので、役場から持ってきた斧を見せて、土間を壊せと息子に迫る。息子は躊躇して、帰ってくれと頭を下げる。そこに母親が現われ、斧を振りかざして土間を壊す。庭先で遊んでいた子どもたちが、大きな音にびっくりして台所の方をじっと見つめる。

短編の映画であるが、「廃村」をせまる行政=村と住民、一人で暮らす母親と息子家族との関係をうまく描いている。財政などの「効率」だけ考えれば「廃村」、集落をなくして居住地を集約化する方がよいかもしれない。「地方創生」という名のもとに。

だが、そこで長年にわたり暮らしてきたお年寄りにとって、住みなれたわが家を離れることが、どんなにつらいことか。たとえ転居した後も、たまには帰って台所に立ち、昔の生活をすこしでも楽しみたいが、それも許されないとは。ダム建設、さらには東日本大震災と原発事故による「強制移住」が思い起こされる。

これを見ると「限界集落」、いま話題の「地方消滅」を思い浮かべてしまう。ただし先のレポートでも指摘したように、単純に「地方消滅」と結論づけてしまうのは問題だ。東北岩手の調査にもとづく、地域社会学者の山下祐介『限界集落の真実—過疎の村は消えるか?』ちくま新書、2012年をあらためて注目したい。本のカバー裏には「高齢化が進み、いずれ消滅に至るとされる『限界集落』。だが危機を煽る報道がなされているのに、実際に消滅したむらはほとんどない。---ソフトの問題、とりわけ世代間継承や家族の問題を見据え、真に持続可能な豊かな日本の地域社会を構想する」と書かれている。山村と集落の実態、集落発の地道な取り組み、集落再生プログラムにも目を向けたい。

(2014年10月10日)